

高齢者と異年齢の子どもたちとの交流

咲間まり子・鈴木聖子・吉田清子・阿部明子・櫻幸恵・下平なをみ

1. 研究の目的

子どもと他世代との「交流」に関する先行研究は、教育学や社会学においては多数の文献が散見されるが、社会福祉的な視点からの研究は多くはない。(秋山・天野 2009) そのため本調査では、「社会的な支えあい」という社会福祉研究の観点を入れ、高齢者と異年齢の子どもたちとの「あそび」を通じた交流場面に焦点をあて調査を計画した。

2. 研究の方法

核家族化の進行に伴い、子どもたちと高齢者のつながりが希薄になっている今日の状況において、今後、地域における様々な活動の中でそのつながりを強めていくことが大切であり、学校においても、高齢社会に対応する教育の一環として、高齢者との交流を積極的に進めていくことが必要と考える。

学校教育において、児童生徒と高齢者との交流活動を進めていくためには、交流を行う場を設定することが不可欠である。交流の場は、活動内容や高齢者の身体的特性等の諸条件に応じ、学校に高齢者を招く場合のほか、高齢者施設への訪問や地域の公共施設の利用など様々なケースが想定されるが、本研究においては、地域の老人福祉施設と小学校との交流を深める機会を促進する。

学校が地域に開かれ、地域社会との連携をより深めていくためには、学校が交流を目的とする高齢者を積極的に受け入れていくことが望まれる。その実践的検証を通して本目的を達成する。

3. 活動状況

- ①地域の老人福祉施設と小学校の交流を深める機会を設定する。⇒地元（滝沢村）で検討。
- ②小学校は、滝沢村教育委員会に相談して、柳沢小学校での実践を検討。
- ③小学生、高齢者の調査票を作成。

小学生調査票は、親や兄弟、教師とは異なる関わりの中、子どもの主体性・涵養性が培われるような場面が必要であると考え、その前提として、調査項目を設定した。

高齢者調査票は、児童と交流する時にどのような方法で交流することが有効な交流となるかを調

査する目的で調査項目を設定した。

- ④先駆的な事例の視察（東京都：品川区立山中小学校）⇒〔山中いきいき広場〕

4. 評価

予期せぬ変更等へは、定期的に研究会を持ち対応する。さらに、教育プロジェクトとして評価改善を行うと共にプロジェクトの運営や児童、高齢者への交流方法等において効果があった取組みを、教育実践ならびにプロジェクト運営の両面から報告書として取りまとめる。

5. まとめ

先駆的事例として、東京品川区の「山中いきいき広場」を見学する。(2011年12月6日～7日)場所は、区立山中小学校の余裕教室を改修し、地域の中老年の方に活動の場と機会を提供している。ここでは、地域の高齢者の介護予防、健康増進、生きがいづくりを目的に、各種講座をはじめとして、高齢者と若い世代との交流など地域に根ざした活動をしている。視察後事業概要報告とし、小学校のカリキュラム及び高齢者事業としての位置づけや展開、予算概要について視察内容のまとめを行った。高齢者が歩いていける距離などの地域性や、山中小学校の独自性（開放性や管理者の理解など）もあり、岩手県で実践するには移動距離や所要時間等を考えると、実践に移すには困難がある。

品川区の視察を受けて今後のプロジェクトの方向性を検討した結果、滝沢村教育委員会と打合せを行ない、就学児童(柳沢小学校)を対象に検討してきたが「教科」が組まれた中で継続し実践するには困難がある。高齢者や研究会も含め、時間的、立地の面から、環境を整える必要がある。その点、「領域」の中で過ごす就学前児童が対象であれば、実践可能ではないかとの結論に至る。当初、2年計画で始めたプロジェクトのため、先駆的事例として、東京品川区の「山中いきいき広場」を見学等、6回の打ち合わせ、会議を持ち検討を重ねてきたが23年度は成果を報告するまでには至らなかった。